香川県埋蔵文化財センター年報

令和２年度

2022. 3

香川県埋蔵文化財センター

は　じ　め　に

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和62年11月1日に設置されました。

令和2年度は、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備、特別支援学校建設に伴う発掘調査の整理、報告書刊行をはじめ、出土品の保管、讃岐国府跡調査事業などを実施しました。そして、これらの調査や整理によって得られた多くの成果をもとに、展示や体験講座、考古学講座などの普及啓発業務を行い、埋蔵文化財の保護意識の向上に努めました。

本書は、令和2年度に実施した事業の内容をまとめたものです。本書が地域の歴史や文化の理解への一助になれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導、ご協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げますとともに、今後とも当センターの活動に皆様の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年3月

香川県埋蔵文化財センター
所　長　　高原　康

目　次

は　じ　め　に
Ⅰ　組織・施設・決算……1
　1　香川県埋蔵文化財センターの組織　……1
　2　施設の概要……2
　3　決算の状況……3
Ⅱ　事業概要……4
1　埋蔵文化財調査事業……4
　中山遺跡……6
　城泉遺跡……12
　沖南遺跡……17
　岡遠田遺跡……20
　上道池東遺跡……23
　青海神社下遺跡……26
2　普及・啓発事業……28
　（1）展示……28
　　①　香川県埋蔵文化財センターでの展示……28
　　②　香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示……28
　（2）現地説明会・地元説明会　……28
　（3）講師の派遣……28
　　①　体験講座など……28
　　②　その他……29
　（4）体験講座……29
　（5）発掘体験講座……29
　（6）考古学講座……29
　（7）まいぶんボランティア活動……29
　（8）新聞記事掲載……30
　（9）資料の貸出・利用……30
　（10）職場体験学習・インターンシップ　……30
　（11）刊行物……30
　（12）ホームページ……30
　（13）ツイッター……30
3　讃岐国府跡探究事業……31
　（1）ボランティア活動……31
　（2）地域との交流……31
　（3）情報発信……31
　（4）関連行事……31
　（5）第３８次調査成果の概要……32
Ⅲ　調査研究
【資料紹介】安藤文良氏旧蔵の出土須恵器円面硯について……37

挿　図　目　次

Ⅱ-1　埋蔵文化財調査事業
第１図　発掘調査遺跡位置図 ……5
Ⅱ-1　中山遺跡
第２図　遺跡位置図（1/25,000）……6
第３図　遺構平面図（1/500）……10
第４図　５区西壁土層断面図……11
Ⅱ-1　城泉遺跡
第５図　遺跡位置図(1/25,000)……12
第６図　遺構平面図（古墳時代以前）(1/800)……14
第７図　遺構平面図(1/250)……15
第８図　調査区土層断面図……16
Ⅱ-1　沖南遺跡
第９図　遺跡位置図（1/25,000）……17
第10図　遺構平面図(1/400)……19
Ⅱ-1　岡遠田遺跡
第11図　遺跡位置図（1/25,000）……20
第12図　遺構平面図(1/700)……22
Ⅱ-1　上道池東遺跡
第13図　遺跡位置図（1/25,000）……23
第14図　遺構平面図(1/300)……25
Ⅱ-1　青海神社下遺跡
第15図　遺跡位置図（1/25,000）……26
第16図　遺構平面図(1/200)……27
Ⅱ-3　讃岐国府跡探索事業
第17図　遺跡位置図（1/25,000）……32
第18図　令和２年度対象地（38-1区、38-2区）と
周辺の既往の調査地位置図……35
第19図　令和２年度調査対象地
38次調査　遺構平面図(1/100)……36
Ⅲ　調査研究
第20図　円面硯実測図(1/4)……37
第21図　遺跡位置図(1/25,000)……39

写　真　目　次

Ⅱ-1　中山遺跡
写真１　現在の北川と調査地近景（東から）……6
写真２　３～５区全景（東から）……6
写真３　４区 SK4003 完掘状況（南から）……7
写真４　５区西壁 SR6001 土層断面（南東から）……7
写真５　５区 SR6001 下層流路
緑釉陶器出土状況（北から）……7
写真６　６区 SR6001 縄文土器出土状況（西より）……8
写真７　６区 SR6001 下層流路
木杭等出土状況（南から）……8
Ⅱ-1　城泉遺跡
写真８　調査地全景（南から）……12
写真９　調査区全景（西から）……12
写真10　15区第１面 SD01 完掘状況（西から）……13
写真11　15区 SK03 下層炭層検出状況（西から）……13
写真12　SR01 北壁 11 層
遺物出土状況（南から）……14
写真13　15区 SX01 集石出土状況（南から）……14
Ⅱ-1　沖南遺跡
写真14　３区南壁断面（北から）……17
写真15　弥生時代の溝（西から）……17
写真16　坪界線の溝　完掘（南から）……18
写真17　SK3054　南北あぜ断面（西から）……18
Ⅱ-1　岡遠田遺跡
写真18　SB01・SB02　完掘（南から）……20
写真19　SH6021　完掘（北から）……20
写真20　SH3029　完掘（東から）……20
写真21　SF5180　完掘（東から）……21
Ⅱ-1　上道池東遺跡
写真22　SF01 炭層・被熱痕（北東から）……23
写真23　掘立柱建物跡　完掘（北西から）……23
写真24　２区牛蹄跡と厩溝（北から）……24
写真25　２区北半　完掘（南東から）……24
Ⅱ-1　青海神社下遺跡
写真26　１区棚田の石垣（北西から）……26
写真27　完掘　全景（北西から）……26
Ⅱ-3　讃岐国府跡探索事業
写真28　38-1区　全景（南東から）……34
写真29　38-2区　全景（西から）……34
Ⅲ　調査研究
写真30　円面硯写真……37
写真31　伝遺物出土地遠景（西より）……38
写真32　瓦山窯跡のある丘陵遠景（北東より）……38

表　目　次

Ⅰ　組織・施設・決算
第１表　職員一覧……1・2
第２表　発掘調査決算……3
第３表　整理・報告決算……3
第４表　管理運営費等決算……3
Ⅱ-1　埋蔵文化財調査事業
第５表　発掘調査遺跡一覧……4
第６表　遺跡の概要一覧……4
第７表　整理・報告遺跡一覧……5
第８表　刊行報告書一覧……5
Ⅱ-2　普及・啓発事業
第９表　展示一覧……28
第10表　入館者数一覧……28
第11表　センター外展示一覧……28
第12表　現地説明会・地元説明会一覧……28
第13表　講演等への講師派遣一覧……29
第14表　体験講座実施事業一覧……29
第15表　発掘体験講座……29
第16表　考古学講座……29
第17表　資料貸出・利用一覧……30
第18表　職場体験学習・インターンシップ一覧……30
Ⅱ-3　讃岐国府跡探索事業
第19表　情報発信一覧……31
第20表　関連行事一覧……31

（註）

1　本書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第Ⅳ系）で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

2　遺構は次の略号により表示した。

SH　竪穴建物　　SB　掘立柱建物　　SP　柱穴・小穴　　SK　土坑　　SE　井戸　　SD　溝

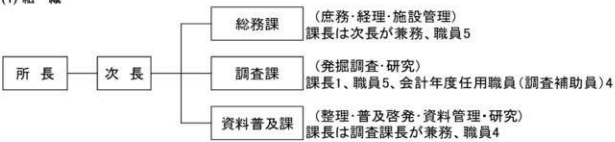
SR　旧河道　　SX　性格不明遺構　　SF　焼成遺構

3　遺跡位置図は国土地理院地形図（1/25,000）に遺跡位置を追記して掲載した。

Ⅰ　組織・施設・決算

1　香川県埋蔵文化財センターの組織

(1) 組　織



(2) 職　員

令和２年４月１日現在

所　　属	職　　名	氏　　名
所　　長		西　岡　　達　哉
次　　長		樋　口　　和　幸
総　務　課	課長（兼務）	樋　口　　和　幸
	副　主　幹	斎　藤　　政　好
	主　　任	高　橋　　範　行
	主　　任	石　田　こ　ず　え
	主　　任	寺　尾　　一　夫
	主　　任	遠　山　　豊
調　査　課	課　　長	佐　藤　　竜　馬
	主任文化財専門員	蔵　本　　晋　司
	文化財専門員	森　下　　友　子
	文化財専門員	宮　崎　　哲　治
	主　　任	熊　野　　博　実
	技　　師	谷　本　　峻　也
	会計年度任用職員（調査補助員）	今　井　　由　佳
	会計年度任用職員（調査補助員）	名　倉　　美　保
	会計年度任用職員（調査補助員）	藤　川　　朋
	会計年度任用職員（調査補助員）	正　本　由　希　子
資料普及課	課長（兼務）	佐　藤　　竜　馬
	主任文化財専門員	森　下　　英　治
	文化財専門員	山　元　　素　子
	文化財専門員	長　井　　博　志
	主　任　技　師	竹　内　　裕　貴

資料普及課	会計年度任用職員（整理作業員）	北濱　敦子
	会計年度任用職員（整理作業員）	小早川真由美
	会計年度任用職員（整理作業員）	土井　美穂
	会計年度任用職員（整理作業員）	宮崎　直子
	会計年度任用職員（整理作業員）	大山　和子
	会計年度任用職員（整理作業員）	加藤　恵子
	会計年度任用職員（整理作業員）	小林奈充子
	会計年度任用職員（整理作業員）	中野　優美
	会計年度任用職員（整理作業員）	山本基公美
	会計年度任用職員（整理作業員）	佐立　晶子
	会計年度任用職員（整理作業員）	池内　妙子
	会計年度任用職員（整理作業員）	大林真沙代
	会計年度任用職員（整理作業員）	森　后代
	会計年度任用職員（整理作業員）	池田　匠

第１表　職員一覧

２　施設の概要

(1) 所 在 地　　香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

(2) 敷地面積　　11,049.23㎡

(3) 建物構造・延床面積

①本　　館	鉄筋コンクリート造・２階建 （一部鉄骨造・平屋建）	1,362.23㎡
②分　　館	軽量鉄骨造・２階建	337.35㎡
③第１収蔵庫	鉄骨造・２階建	1,525.32㎡
④第２収蔵庫	鉄骨造・３階建	2,040.33㎡
⑤車　　庫	鉄骨造・平屋建	29.97㎡
⑥自転車置場	鉄骨造・平屋建	25.00㎡

3　決算の状況

（単位：千円）

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	中山遺跡	19,264
	城泉遺跡	17,650
道路課	上道池東遺跡	20,167
	沖南遺跡	29,819
	岡遠田遺跡	43,930
	青海神社下遺跡	7,679

※職員人件費は除く。

第２表　発掘調査決算

（単位：千円）

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	山下岡前遺跡	4,505
	神野遺跡	2,373
	湊山下古墳	456
	内間遺跡	7,702
道路課	名遺跡	5,022
	岸の上遺跡	14,920
	六条下所遺跡	233
特別支援教育課	旧練兵場遺跡	29,261

※職員人件費は除く。

第３表　整理・報告決算

（単位：千円）

事業名		決算
管理運営費等	管理運営費	6,571
	職員給与費	126,396
	讃岐国府跡調査事業	6,495
合計		139,462

第４表　管理運営費等決算

Ⅱ　事業概要

1　埋蔵文化財調査事業

発掘調査を分掌する調査課では調査班２班を編成し、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備に伴い計６遺跡の発掘調査を行った。

一方、報告書作成を分掌する資料普及課では整理班２班を編成し、国道バイパス建設、県所管国道整備、県道整備、特別支援学校建設に伴う５遺跡の整理及び５冊の報告書の刊行を行った。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	調査期間
国土交通省	国道 11 号 大内白鳥 バイパス	中山遺跡	東かがわ市土居	1,472	６月～８月
		城泉遺跡	東かがわ市白鳥	720	９月～10 月
道路課	国道 438 号	沖南遺跡	丸亀市飯山町	1,847	４月～７月
		岡遠田遺跡	丸亀市飯山町	4,179	８月～３月
	円座香南線	上道池東遺跡	高松市香南町	3,548	11 月～３月
	高松坂出線	青海神社下遺跡	坂出市青海町	532	８月

第５表　発掘調査遺跡一覧

遺跡名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
中山遺跡	鎌倉～江戸時代の旧河道	旧河道につながる溝状遺構 弥生土器、須恵器、土師器等
城泉遺跡	弥生時代後期の集落遺跡 古墳時代中期の集落遺跡	弥生時代後期の土坑 古墳時代中期の旧河道及び包含層 弥生土器、初期須恵器、土師器等
沖南遺跡	弥生時代～鎌倉時代の集落遺跡	弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡 鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物跡 弥生土器、石器、須恵器、土師器等
岡遠田遺跡	弥生時代～室町時代の集落遺跡	弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡 鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物跡 弥生土器、石器、須恵器、土師器等
上道池東遺跡	古代の遺物包含層 江戸時代の水田跡	江戸時代の鋤溝跡と牛の足跡 飛鳥時代末の須恵器、近世土器等
青海神社下遺跡	鎌倉時代～室町時代の集落遺跡 江戸時代以降の棚田跡	鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物跡 棚田に伴う石積み遺構 鎌倉時代～室町時代の土器等

第６表　遺跡の概要一覧

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
国土交通省	山下岡前遺跡	東かがわ市湊	4月～6月
	神野遺跡	さぬき市津田町	7・8月
	湊山下古墳	東かがわ市湊	報告書刊行（前年度整理）
道路課	名遺跡	丸亀市飯山町	9・10月
	岸の上遺跡	丸亀市飯山町	11月～3月
	六条下所遺跡	高松市六条町	報告書刊行（前年度整理）
特別支援教育課	旧練兵場遺跡	善通寺市善通寺町	4～3月

第７表　整理・報告遺跡一覧

書名
国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊　湊山下古墳
国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第８冊　山下岡前遺跡
国道 11 号津田交番前交差点改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　神野遺跡
国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊　名遺跡
県道太田上町志度線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　六条下所遺跡
讃岐国府跡３
香川県埋蔵文化財センター年報　令和元年度
埋蔵文化財試掘調査報告 32　令和元年度　香川県内遺跡発掘調査

第８表　刊行報告書一覧

第１図　発掘調査遺跡位置図

中山（なかやま）遺跡

遺跡は、二級河川番屋川の支流北川の中流北岸に位置する。調査地の北側には比高１～1.5ｍの連続する崖面が概ね北川の流路に平行して認められ、完新世段丘崖である可能性が高いと考えられる。調査地は、段丘面下の氾濫原面に相当する地形面を中心とする。

本年度の調査区は、昨年度調査地の東西両側に位置し、東側調査区（３～５区）と西側調査区（６区）の２か所である。６区では、隣接する市の浄水場施設建設時に遺構面が強く削平され、旧耕作土や整地土層下で、後述する第２遺構面の旧北川の流路堆積が確認されたのみであった。したがって以下では、東側調査区での成果を中心に記載する。なお、遺構名は調査時のものをそのまま使用する。

第２図　遺跡位置図（1/25,000）

写真１　現在の北川と調査地近景（東から）

上述したように、調査地の大部分は完新世段丘下の氾濫原面と考えられる。県下では、完新世段丘面下の氾濫原面が本発掘調査の対象となった例は乏しく、丸亀市飯野・東二瓦礫遺跡等が挙げられるに過ぎない。そこで、本地形面の開発の具体的な内容を明らかにする資料を得ることと、旧南海道の可能性が指摘される道路遺構や、それと同時期の建物群が検出された坪井遺跡が近接し、陸上交通と結びついた河川交通に関する遺構の検出も期待されたことから、本発掘調査を実施した。

写真２　３～５区全景（東から）

東側調査区では、基本的に耕作土や旧耕作土等下で第１遺構面を検出した。本遺構面の基盤層は、その大半は後述する第２遺構面の北川の旧流路堆積物であるが、段丘崖に隣接する３区を中心に、灰白色粘土の堆積が認められた（第３図）。上述した旧流路堆積物は粘土上面に堆積しており、灰白色粘土はより古い堆積物であり、段丘面を形成する堆積物の一部である可能性が高いと考える。おそらくは３区水田の造成時に、段丘の一部を削り水田に取り込んだ可能性が考えられる。

第１面で検出した遺構には、南北溝 SD3003 や東西溝 SD5001、SD5001 の東端部で合流する溜め池状遺構 SD3002、土坑 SX3001B、素掘り井戸 SK4003、土取り遺構の可能性が考えられる SX4001・SX4002、耕作面の可能性が高い SR5002 のほか、詳細な調査は行わなかったが撹溝群等がある。

SD3003 は、上述した灰白色粘土上面で検出した遺構で、残存深は 0.2ｍ程度と浅く、流水時の堆積

層とみられる灰色粗砂のみが堆積していた。段丘面削平時に遺構上面も削奪された可能性が考えられる。遺物は出土していないが、本来は段丘面上を流下していた可能性があることから、中世以前に遡る遺構の可能性を想定したい。

SD3002は、旧地形の検討から北側の丘陵より南へ流下する旧河道の南端部に位置し、埋没の進んだ旧河道を利用した溜め池の一部を検出したものと考える。SD3003の流路方向は、概ね現状での地割方向と合致し、溜め池へ給排水する水路と考えられるが、東端は近・現代の地下げにより削奪される。SX4001・SX4002は、残存深よりその地下げ前に開削された可能性も考えられるが、南端は北川の護岸工事による攪乱により途切れる。

SR5002は、昨年度調査区より延長する遺構で、掘り方北部は直線状を呈し、現状での地割の方向とは異なる。残存深は0.2m前後で、底面は概ね平坦であることから、水田等の耕作面の可能性を考える。

上述したSD3002以下の各遺構からは、肥前系陶磁器や備前焼、近世の在地産土師質土器等の遺物が出土しており、各遺構の機能時は近世後半を主体としていたと考えられる。この点に関して、貞享三年(1686)に編纂された『翁媼(おうおう)夜話』巻之三には、旧大内郡内に「中山池」が2ヶ所記載され、文政元年(1818)に編纂された『池泉合符録』には「中山大池」が記載されている。中山大池は、現在の北川の上流域に同名の池があり、その池を指すと考えられる。また、『翁媼夜話』に記載された2ヶ所の「中山池」は、現引田町の「中山池」と、「中山大池」の前身の池である可能性が高い。つまり、池の名称が「大池」と改称されていることから、貞享三年から文政元年までの間に中山池の堤防をかさ上げして貯水量を増やし、また北川の流路を固定化して、調査地のような低地部の農業開発を推し進めた可能性が考えられる。上述した調査により検出された遺構の時期と整合的に理解でき、氾濫原面の本格的な開発は、北川上流の中山大池の整備とそれに伴う北川の流路の固定化が契機となった可能性を指摘したい。なお、第1遺構面上には北川の氾濫に伴うとみられる砂層の堆積が認められ(第4図10・13層)、近世段階に耕地化がなされた後もなお、洪水の被害を被っていたことが窺える。

写真3　4区 SK4003 完堀状況（南から）

写真4　5区西壁 SR6001 土層断面（南東から）

写真5　5区 SR6001 下層流路
緑釉陶器出土状況（北から）

上述したように、第1遺構面のベースは、基本的に旧北川の氾濫堆積物である黄色系砂層に広く覆われる。調査期間の関係から、旧流路の内容とその堆積時期等を把握することを目的として、5区西壁際

と６区東壁際に南北にトレンチを設定して、第２面の調査を実施した。

以下では、５区西壁際に設定したトレンチでの調査を中心に記載する。流路はトレンチ全面において検出され、壁面崩落の危険性を考慮して、トレンチ内全面での基盤層までの掘り下げは断念し、一部分のみさらにトレンチを設定し流路底を確認した。確認部で流路底は標高 15.5 m前後にあり、流路深は最大２m前後を測る。

写真６　６区 SR6001 縄文土器出土状況（西より）

確認された流路堆積は基本的に上下２層に大別され、下層流路は部分的な調査にとどまったが、上層流路では断面観察により、幅 1.5 ～ 5 m以上の様々の規模の流路が複数重複し、流路位置を変更しながら流下していたことが判明した。上層流路は、調査時には SR6001a ～ d の４条の流路として大きく把握したが、実際には SR6001c と SR6001d とした２条の流路はさらに複数の流路単位に細分され、時間的な先後関係等からも２つの流路に区分する必要性に乏しいことが判明したため、SR60001 c・d 流路として一括する。

写真７　６区 SR6001 下層流路
木杭等出土状況（南から）

上層流路からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器杯・杯蓋等、土師質土器足釜等、備前焼甕・擂鉢、亀山焼？、龍泉窯系青磁碗等の破片が多量に出土した。縄文土器や弥生土器は、小片でローリングを受けており、遠隔地より流下堆積した可能性が考えられる。古代以降の遺物は、煮沸具では外面の炭化物が付着する等、近接した場所で廃棄された可能性が考えられ、出土遺物の時期的な点でも隣接する坪井遺跡との関係が想定される。各流路は、ほぼ同じ精度で調査を行ったが、遺物の出土量は SR6001a･b の北側の流路にやや集中する傾向がみられた。出土遺物より、出土量が相対的に増加する 13 ～ 14 世紀以降に埋没が開始し、16 世紀～ 17 世紀前葉頃には概ね埋没が終了した可能性が考えられる。

下層流路は、部分的な調査にとどまり、全体像については一部不詳な点が残されるが、上層流路よりは規模が大きく、流路幅は 10 m を超えることは確実である。上層流路により、上面を削奪されているため、残存深は確認した範囲で 0.7 m と浅い。灰～黄色系の細～粗砂・粘土を中心とした堆積層で、基本的に上方級化が認められる。下層流路からの遺物は、小片化したものが多く、また調査が一部でしか行えなかったため、遺物量は少ない。時期を特定することは困難だが、和泉型瓦器碗や土師質土器足釜の小片等から 13 世紀代には一程度埋没していた可能性は高い。また、緑釉陶器碗の破片１点が出土しているのが注目される。

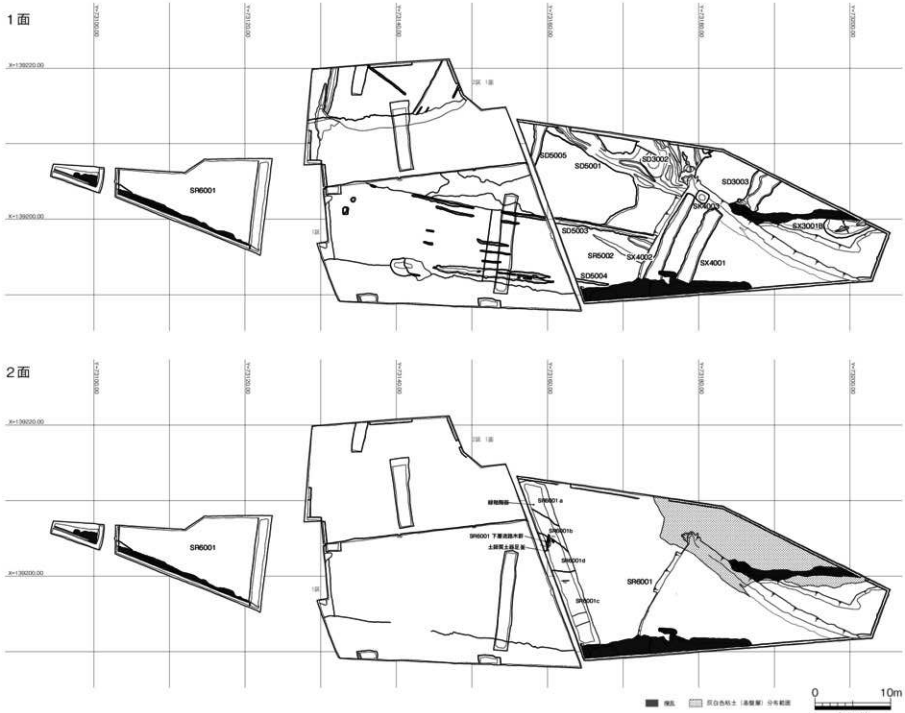
下層流路からは、トレンチ中央部付近で、南北方向に自然木を数本並べ、周囲に木杭を打設した遺構が検出された。トレンチ部分のみの調査であったことと、上部を上層流路に削奪されていることもあり、遺構の性格については不明な点が多いが、堰等の可能性も考えられる。

下層流路と上層流路にみられる流路規模の相違は、列島規模での気候変化の要因も考えられるが、完新世段丘の形成により段丘面上の開発が可能となり、北川上流域より取水し、灌漑に利用した可能性も、今後周辺域の調査による実証を必要とするものの、その要因の一つとして想像される。

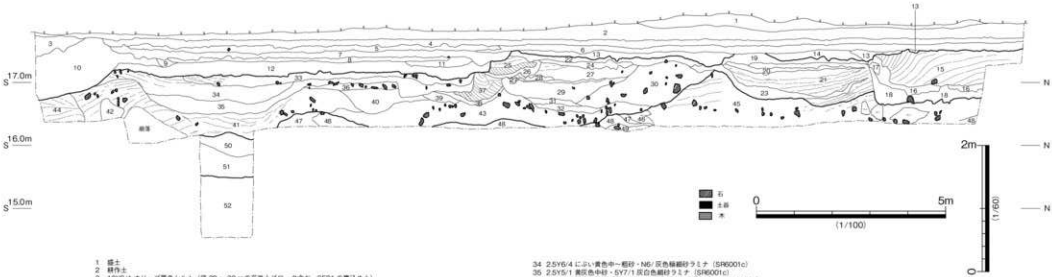
まとめ

今回の調査により、完新世段丘面下の氾濫原面における土地利用の推移について、具体的な詳細が把握できたことは、大きな成果である。

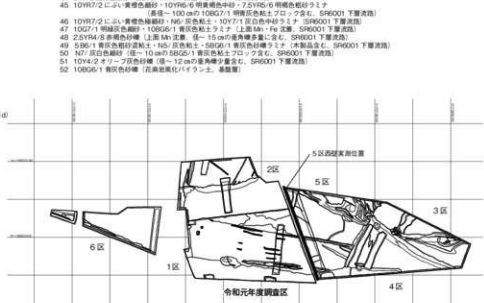
また、旧河道内において、木杭と自然木を利用した人為的な構造物が確認された。調査区の関係で、その詳細は明らかにはできなかったが、来年度以降には、より段丘崖に近い地点が調査予定となっており、路線内の段丘面上では古代～中世の集落の存在が確認されており、段丘崖部分で同時期の護岸施設等の検出も予想される。坪井遺跡の機能的位置付けも、それに伴い変更する余地も考えられ、今後の調査に期待したい。



第３図　遺構平面図(1/500)



1　盛土
2　耕作土
3　10YR/1 オリーブ黒色シルト（径 20 ～ 30 cmの花崗土ブロック含む、SE01の裏込め土）
4　2.5Y5/3 黄褐色粘砂質土（Fe・Mn、径～ 5cm の 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土ブロック少量含む、旧耕作土？）
5　5Y7/2 灰白色細～中砂（径～ 3cm の花崗土ブロック含む、盛土）
6　5Y4/2 灰オリーブ色粘砂質土（Fe、径～ 10 cmの 10Y7/1 灰白色シルトブロック少量含む、旧耕作土？）
7　10YR5/4 にぶい黄橙色粘砂質土（Fe・Mn、炭化物粒少量含む、旧耕作土？）
8　2.5Y7/4 浅黄色中～粗砂（Mn、旧耕作土）
9　10Y6/1 灰白色粘砂質シルト（Mn 著、部粘質、炭化物粒含む、SD5004）
10　10Y5/6 黄褐色中～粗砂（径～ 5 cmの茶角礫少量含む、洪水堆積層？）
11　10Y5/1 灰色粘砂質シルト（Fe、炭化物粒含、SD5003）
12　N6/ 灰色粘砂質シルト（Fe、部粘質、SR6002）
13　5Y5/1 灰色粘砂（Fe、洪水堆積層）
14　10YR7/4 にぶい黄橙色～ 2.5Y5/1 黄灰色粘砂質り粘土（Mn、SD5005）
15　2.5Y7/2 灰黄色細砂～ 5YR4/8 赤褐色粘砂・7.5YR4/1 褐灰色粘土ラミナ（SR6001a）
16　2.5Y7/2 灰黄色極細砂～シルト（Fe、SR6001a）
17　5YR5/6 明褐色粘砂（SR6001a）
18　10Y7/1 灰白色細砂・7.5GY6/1 緑灰色シルト・N6/ 灰色粘土ラミナ（やや粘砂質、SR6001a）
19　2.5Y4/1 黄灰色粘土（Fe、5Y5/1 灰白色粘砂ラミナが比に近じる、SR6001b）
20　2.5GY5/1 オリーブ灰色～ 7.5GY7/1 明緑灰色極細砂（SR6001b）
21　10YR6/6 明黄褐色中砂・10YR7/2 にぶい黄橙色細砂・5YR3/6 暗赤褐色粘砂ラミナ（SR6001b）
22　5GY7/1 明オリーブ灰色粘砂質シルト（Fe、部粘質、SR6001b）
23　N5/ 灰色細砂・2.5GY8/1 灰白色極細砂・N6/ 灰色粘土ラミナ（SR6001b）
24　5Y4/1 灰色粘砂質粘土（Fe、SR6001d）
25　2.5Y7/2 灰黄色細～中砂（SR6001d）
26　2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト・10GY8/1 明緑灰色極細砂・5Y8/2 灰白色中砂ラミナ（Fe、炭化物粒少量含む、SR6001d）
27　10YR8/3 浅黄橙色細砂・10YR6/8 明黄褐色粘砂・2.5Y4/1 黄灰色中砂ラミナ（SR6001d）
28　5Y4/1 灰色粘砂質土・10BG6/1 青灰色粘土ラミナ（SR6001d）
29　N6/ 灰色粘土（強粘質）・10Y7/1 灰白色中砂ラミナ（Fe、SR6001d）
30　7.5GY6/1 緑灰色粘砂質土（Fe、径～ 15 cmの茶角礫含む、SR6001d）
31　5BG6/1 青灰色粘土（細砂混、SR6001d）
32　2.5Y7/4 浅黄色細～中砂（上部Fe沈澱、SR6001d）
33　5Y5/1 灰色細砂・2.5Y6/2 ～ 2.5Y7/2 灰黄色中砂ラミナ（SR6001c）
34　2.5Y5/4 にぶい黄色中～粗砂・N6/ 灰色極細砂ラミナ（SR6001c）
35　2.5Y5/1 褐灰色中砂・5Y7/1 灰白色細砂ラミナ（SR6001c）
36　2.5Y7/2 灰黄色砂礫（径～ 15 cmの茶角礫やや多量に含む、SR6001c）
37　5Y7/2 灰白色細砂・10YR5/8 黄褐色中～粗砂ラミナ（SR6001c）
38　N6/ 灰色・N7/ 灰白色・2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂ラミナ（SR6001c）
39　10YR4/6 褐色中砂・2.5Y7/2 灰黄色細砂ラミナ（径～ 5 cmの N6/ 灰色粘土ブロック含む、SR6001c）
40　10YR7/2 にぶい黄橙色細砂～ 7.5YR5/6 明褐色中砂～ 5YR4/8 赤褐色中砂ラミナ（SR6001c）
41　10YR8/3 浅黄橙色細砂・5YR4/8 赤褐色中砂ラミナ（SR6001c）
42　10BG6/1 青灰色粘土・N7/ 灰白色極細砂ラミナ（Fe、SR6001c）
43　2.5Y6/4 にぶい黄色細～中砂・7.5YR5/6 明褐色粘砂ラミナ（SR6001c）
44　5Y7/3 浅黄色細砂・2.5Y6/4 にぶい黄色中砂ラミナ（SR6001c）
45　10YR7/2 にぶい黄橙色細砂・10YR6/6 明黄褐色砂・7.5Y5/6 明褐色粗砂ラミナ
（長径～ 100 cmの 10BG7/1 明青灰色粘土ブロック含む、SR6001 下層流路）
46　10YR7/2 にぶい黄橙色極細砂・N6/ 灰色粘土・10Y7/1 灰白色中砂ラミナ（SR6001 下層流路）
47　10GY7/1 明緑灰色細砂・10BG6/1 青灰色粘土ラミナ（上面Mn・Fe 沈澱、SR6001 下層流路）
48　2.5YR4/8 赤褐色砂礫（上面 Mn 沈澱、径～ 15 cmの茶角礫多量に含む、SR6001 下層流路）
49　5Y6/1 青灰色粘砂質粘土・N5/ 灰色粘土・5BG6/1 青灰色砂礫ラミナ（木製品含む、SR6001 下層流路）
50　N7/ 灰白色細砂（径～ 10 cmの 5BG5/1 青灰色粘土ブロック含む、SR6001 下層流路）
51　10Y4/2 オリーブ灰色砂礫（径～ 12 cmの茶角礫少量含む、SR6001 下層流路）
52　10BG6/1 青灰色砂礫（花崗岩風化パイラン土、基盤層）



第４図　５区西壁土層断面図

城泉遺跡（しろいずみ）

遺跡は、讃岐山脈北縁の標高 267 m をピークとする山塊より北へ派生した舌状丘陵北端部に位置する。平成 30 年度に実施した調査地の東側微高地上で、調査前は宅地として利用されていた。現地表面の標高は、7.4 m 前後である。

調査の結果、調査地の西端部で南の丘陵より連続し、北へ延びる微高地が確認され、調査区東側はその微高地の斜面部（調査時には SR01 と呼称した）となることが判明した。微高地は、調査区南端で幅約 16 m、北端部で約 2.5 m と北へ向けて急速に幅を狭める。微高地部では、宅地造成前の旧耕作土層下で地山層の黄色系粘土の堆積を確認しており、耕地化により丘陵斜面部を含め強い削平を被ったことがその要因と考えられる。また、削平により微高地上での遺構は削奪されたと考えられ、確認されなかった。

第 5 図　遺跡位置図 (1/25,000)

写真 8　調査地全景（南から）

斜面部は、最大 10 層程度に細分される黒褐系色粘土を主とする堆積物が、概ね北東方向へ斜面堆積していた。上位 2 層（SR01 最上層）下で溝 SD01 を検出し、第 1 遺構面とした。SD01 は、幅 2.6 m 前後、深さ 0.6 ～ 1.0 m、僅かに湾曲して東西に配された東西溝で、断面形は箱状ないし逆台形状を呈する。東端部は調査区内で途切れるが、調査区東側は宅地造成の影響が深くまで及んで、遺構面が広く削奪されていたこともあり、本来はさらに東へ延長していたものと考えられる。遺物は、基盤層となる SR01 中・下層からの混入とみられる弥生土器や土師器、須恵器等の小片が主で、溝本来の時期を特定できる遺物はみられなかった。斜面部が一定程度埋没した後に、微高地を横断して開削されていることや、溝の形状等より、区画溝としての機能も想定される。

写真 9　調査区全景（西から）

斜面部の堆積層は、上～下層下で概ね地山層が露出し、一部窪地に最下層の堆積が認められた。中層を中心に、古墳時代中期の土師器や須恵器が良好な状態で出土した。本来は、微高地上にも当該時期の遺跡が展開していた可能性が考えられる。

また、斜面部では、地山面上で弥生時代から古墳時代の柱穴や土坑数基を検出した。SK01 は、東西 3.5 m 以上、南北 1.8 m 以上の大型の集石土坑と考えられる。東端は斜面堆積に、北端は試掘トレンチによ

りそれぞれ削奪を被る。出土遺物より、弥生時代後期末～終末期と考えられる。調査区北西隅で検出した土坑SK02や、SK01の東に隣接して検出した大型土坑SK04も同時期の遺構と考えられる。SK04では、埋土上位より多量の土器片が出土し、最終的には廃棄土坑として利用されたと考えられる。なお、土坑中央部には、底面よりやや浮いた位置で大型の花崗岩礫がほぼ水平に据え置かれ、底面には径20cm程度のピットが掘られていた。これらの用途は不明である。辺2m前後の平面略隅丸方形を呈する集石土坑SX01からは、石材の間より須恵器片が出土したことから、古墳時代中期に降る。確実に古墳時代中期の遺構は、今回の調査では本遺構のみである。

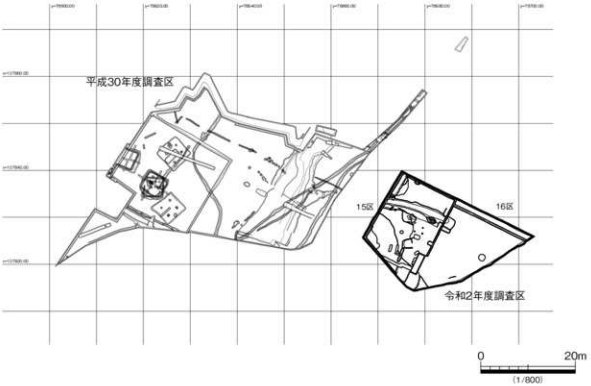
写真10　15区第1面SD01完掘状況（西から）

写真11　15区SK03下層炭層検出状況（西から）

調査区中央部で検出したSK03は、東西1.0m以上、南北約0.8mの整った隅丸長方形を呈する土坑で、SR01最下層下面で検出した。残存深0.15～0.2mを測り、断面形は概ね箱状を呈するが、底面には径10cm程度の窪みが顕著に認められた。土坑内からは、埋没途中で混入したと考えられる拳大程度以下の礫が若干量出土したのみで、時期を特定できる遺物は出土していない。最下層からは、弥生土器が出土しており、その点で弥生時代の遺構の可能性が想定される。土坑周囲は、底面より10cm程度上位の周壁が被熱により赤色化しており、土坑内で燃焼行為がなされた可能性が考えられ、埋土中からは多量の炭化材片が出土した。被熱痕は南～西壁が良好に残存しており、それ以外は埋没時に剥離した可能性が高い。また、埋土中に天井部に相当する堆積物は確認しておらず、天井部の構造は不明である。床面は、上述したように若干の起伏が認められるが、概ね東へ傾斜しており、東端部に燃焼部が存在した可能性が高い。鍛冶炉の可能性も考えられたが、調査時に鉄器片や鍛冶滓は出土しなかった。今後、埋土を篩等により選別し、鍛造鉄片等の検出を行い、用途や機能を検討する予定である。

まとめ

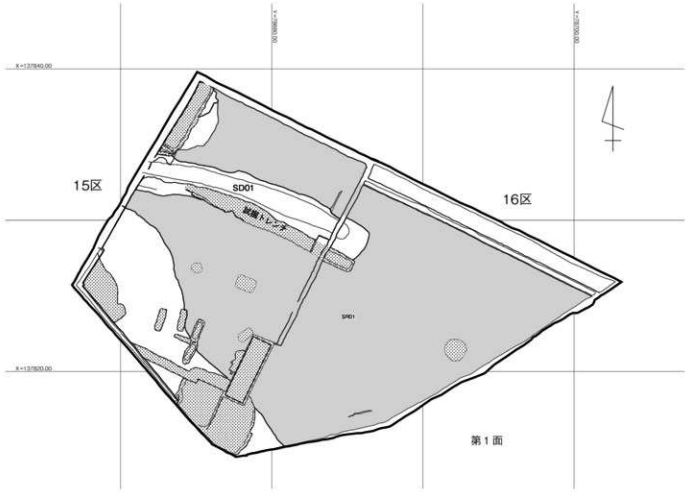
今回の調査により、古墳時代中期の集落域が確認された平成30年度調査区の東側の土地利用の詳細が明らかとなった。残念ながら、生活域が形成されていた可能性の高い微高地部分は近代以降の削平により、遺構は検出されなかったが、その東側斜面部において土坑等の遺構が確認され、遺跡がさらに東へ展開することは確実となった。来年度以降に予定される当該周辺の調査区の成果を含め、古式の須恵器を多量に出土した本遺跡について、周辺の地形や遺跡を含めた評価を行うことが、今後の課題となろう。

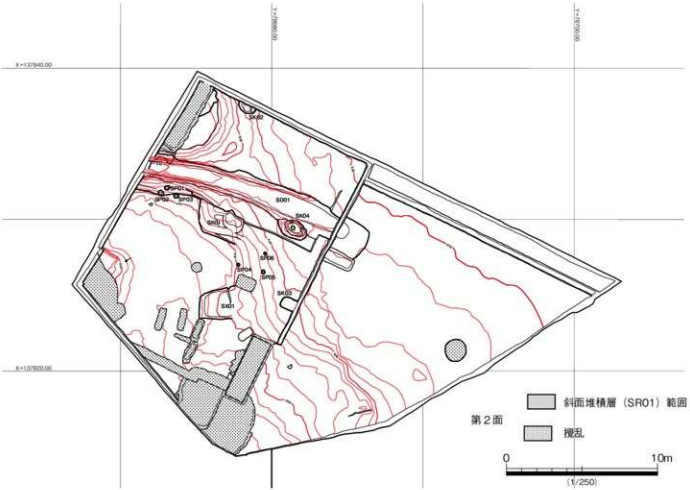


第６図　遺構平面図 (古墳時代以前)(1/800)

写真 12　SR01 北壁 11 層
遺物出土状況（南から）

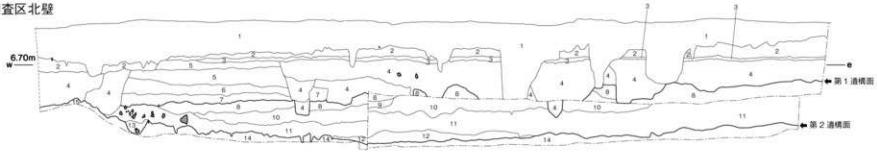
写真 13　15 区 SX01 集石出土状況（西から）





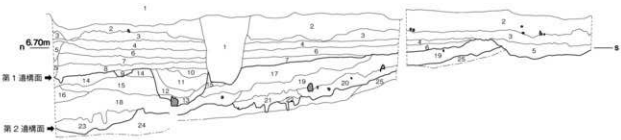
第７図　遺構平面図 (1/250)

調査区北壁

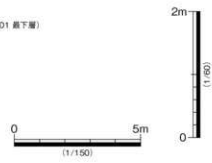


1　花崗土盛土・撹乱
2　旧耕作土
3　床土
4　撹乱
5　旧耕作土
6　2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混り粘土（Fe、炭化物含む、SR01 最上層）
7　2.5Y3/1 黒褐色粗砂混り粘土（Mn、炭化物粒含む、SR01 上層）
8　2.5Y5/1 黄灰色粗砂質土（SR01 中層）
9　2.5Y5/3 黄褐色～ 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂（SR01 中層）
10　5Y5/2 灰オリーブ色粗砂混粘土（Mn・Fe 含、SR01 中層）
11　2.5Y3/1 黒褐色粘土（Mn・Fe、粗砂・炭化物粒少量含む、径～ 50 cmの砂岩・花崗岩の円～角礫を西端部に多量に含む、SR01 下層）
12　5Y4/1 灰色粗砂質土（Mn 多、SR01 最下層）
13　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混粘土（Mn・Fe 含、やや強粘質、SK02）
14　2.5Y7/2 灰黄色粗砂混粘土（Mn・Fe 含、地山）
15　2.5Y7/4 浅黄色粗砂混粘土（花崗岩風化パイラン土、地山）

調査区中央南北壁



1　試掘トレンチ撹乱
2　花崗土盛土
3　旧耕作土
4　床土
5　撹乱
6　10YR6/6 明黄褐色粗砂混り粘土（Mn、炭化物粒含む、SR01 最上層）
7　2.5Y5/4 黄褐色粗砂混粘土（Mn、SR01 上層）
8　2.5Y3/1 黒褐色～ 10YR3/2 黒褐色粗砂混り粘土（Mn、SR01 上層）
9　10YR3/1 黒褐色粗砂混り粘土（遺構埋土？）
10　10YR3/2 黒褐色粗砂混り粘土（上面 Mn 沈着、SD01 上層）
11　5Y5/2 灰オリーブ色粗砂混り粘土（Fe、粗砂多量に混じる、SD01 中層）
12　2.5GY5/1 灰オリーブ色粗砂混り粘土（Fe、SD01 下層）
13　7.5Y5/2 灰オリーブ色粗砂混り粘土（Fe、SD01 最下層）
14　2.5Y5/1 黄灰色粗砂質土（SR01 中層～北壁 B 層）
15　2.5Y5/3 黄褐色～ 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂（SR01 中層）
16　5Y5/2 灰オリーブ色粗砂混り粘土（Mn・Fe、SR01 中層）
17　10YR3/2 黒褐色粗砂混り粘土（Mn、やや強粘質、SR01 中層）
18　2.5Y3/1 黒褐色粘土（Mn、やや粗砂混じる、ややしまる、SR01 下層）
19　10YR3/2 黒褐色粗砂混り粘土（Mn、やや強粘質、SR01 下層）
20　2.5Y3/1 黒褐色粗砂混り粘土（Mn、炭化物、径～ 10 cmの滑角～亜円礫少量含む、SR01 最下層）
21　5Y5/1 灰色～ 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混り粘土（Mn、SR01 最下層・SK03 埋土）
22　10YR3/1 黒褐色粘土（Mn、ややしまる、SR01 最下層）
23　5Y4/1 灰色粗砂質土（Mn 多、SR01 最下層）
24　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混り粘土（Mn、やや粗砂多く混じる、地山）
25　10YR7/6 明黄褐色粘土（Mn、強粘質、地山）



第８図　調査区土層断面図

沖南（おきみなみ）遺跡

沖南遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する弥生～鎌倉時代にかけての遺跡である。調査地は丸亀平野東部に位置し、大束川の南方の水田地に立地する。周辺には北から西に30°振れる条里型地割が広がっている。

本遺跡のすぐ北方には、古墳時代や古代の溝状遺構が確認された沖遺跡が存在し、さらにその約300m北方に、古墳時代後期の竪穴住居跡や古代の掘立柱建物跡や水田跡を検出した名遺跡がある。また、沖南遺跡の西北西方向約500mに古代寺院である法勲寺跡が所在する。

第９図　遺跡位置図（1/25,000）

調査地は大きく４つの調査区に分けた。基本的な層序は、1.現代の耕作土、2.複数時期の田畑層、3.遺構面（1面目）、4.遺構面（2面目）、5.地山の順となる。今年度の調査では、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡が検出された。

弥生時代

複数の溝状遺構が確認されている。検出されたのは主に３区・４区で、何条もの溝が重複関係にあった。いずれの溝も方向に規則性はない。出土した土器から、弥生時代後期の年代が与えられる。

古代末～中世

掘立柱建物跡、溝状遺構、柱穴、土坑などが検出された（遺構面１面目）。

調査区の西端に長大で幅の広い溝状遺構が存在する。この溝は周辺の条里型地割に一致していることから、条里の坪界溝と判断した。土層は粘質土の層の下に細～粗砂が混じる層が堆積しており、流水した後に滞水あるいは埋没したものと考えられる。出土遺物は土師質土器、須恵器、青磁、白磁、瓦などがあり、12世紀から13世紀前半の範疇に収まることから、現段階では坪界溝の開削と埋没の年代をこの間としておく。

写真14　３区南壁断面（北から）

写真15　弥生時代の溝（西から）

また、坪界溝（３区）の近くに大型の土坑（SK3054）が検出された。埋土内からは土師質土器、須恵器、青磁、白磁、瓦などが出土し、12世紀から13世紀前半のものと考えられる。当初は大型の廃棄土坑と想定していたが、出土遺物が土坑の大きさに比して少なく、また埋土の下層に滞水の痕跡があることから、素掘りの井

戸の可能性がある。

一方、4区では方形の柱穴列が検出されており、掘立柱建物跡の一辺であると推測されるが、その他の部分は調査区外のため、不明である。出土した遺物から、12世紀代と考えられる。時期的には新しいものの、方形の掘方をもつことから、公的な性格を有していたと推測される。

出土遺物は土師質土器、須恵器を中心として青磁、白磁などの輸入陶磁器類、硯、石剣、瓦類（軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦）などが検出された。一般的な集落に比して、輸入陶磁器類の出土量が非常に多く、軒瓦も法勲寺跡や坂田廃寺（高松市）と同文のものが確認されている。

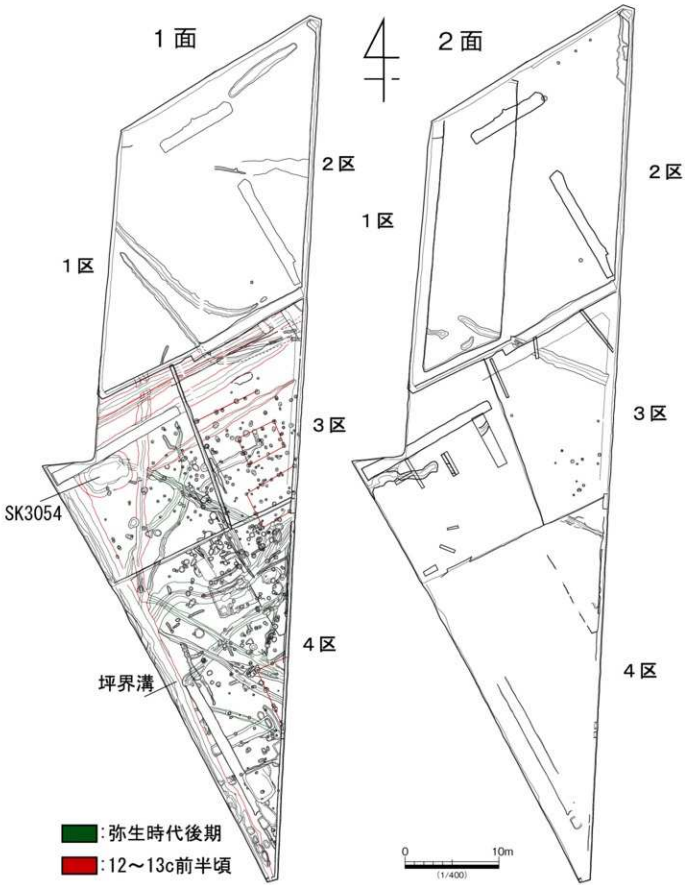
写真16　坪界線の溝　完掘（南から）

まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の溝状遺構と、平安時代末から鎌倉時代にかけての集落跡が確認された。

本遺跡は軒瓦や多くの輸入陶磁器類が確認されているなど、一般的な集落とは異なる様相を呈する。近隣に所在する法勲寺跡と同文の軒瓦が出土していることから、同寺に関係する有力者が座した集落跡であったと想定される。

写真17　SK3054　南北あぜ断面（西から）



第10図　遺構平面図(1/400)

岡遠田遺跡

岡遠田遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する弥生時代後期～中世の遺跡である。本遺跡は岡田台地上にあり、そのなかでも舌状に張り出した部分の先端部に位置する。北には「讃岐富士」で知られる飯野山を正面に据え、眼下には丸亀平野が広がる。遺跡周辺の地形をつぶさに見ると、台地に狭小な谷筋が何本も入り組み、複数の丘陵が形成されている。この丘陵上に多くの遺跡が営まれており、本遺跡もそれらのうちのひとつである。

第 11 図　遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の周辺には複数の遺跡が展開する。北西には弥生時代後期の集落跡である東原遺跡があり、遺跡のすぐ西には、７世紀末から８世紀初頭にかけての大型掘立柱建物跡が確認されており、この地域に跋扈した地方豪族の居館跡と推測されている遠田遺跡が存在する。また、本遺跡の南方には岡遠田南遺跡が展開し、古墳時代後期･中世の集落跡の存在が指摘されている。

調査区は大きく６区に分け、岡１号池の北側に１～４区、東側に５～６区を設定した。基本的に耕作土直下に遺構面が広がるが、１～３区は西側が崖となっているため、西に向かうほど、土地を嵩上げした造成土が厚く堆積している。

今回の調査では、弥生時代後期・古墳時代中期後半・平安時代末から鎌倉時代にかけての集落跡が確認された。

写真 18　SB01・SB02　完掘（南から）

弥生時代後期

竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・土坑などが認められる。

SB01・02 は１区で検出された掘立柱建物跡で、東西２間×南北３間の大きさであるが、南側の東

写真 19　SH6021　完掘（北から）

写真 20　SH3029　完掘（東から）

西間は１間しかない。柱穴の重複関係から、SB01 の方が新しく、西辺や北側の間柱を共有していることからも、建て替えをしていると想定される。

また、当時期の竪穴住居跡が 14 棟確認された。円形のものが大部分を占めており、方形は１区の１棟のみである。全体として、主柱穴は５穴以上あり、多角形状の配置を示す。SH6021 のように残存状態が良好なものだと、ベッド状遺構もみられる。中央炉は、香川県内でしばしば確認される「１０型土坑」の形態を取る。

出土遺物は、主に竪穴住居跡から、土器、石鏃、鉄鏃、玉類などが出土している。

写真 21　SF5180　完掘（東から）

古墳時代中期後半

竪穴住居跡が検出されている。

SH3029 は３区で確認された方形竪穴住居跡である。主柱穴は４穴で、地床炉をもつ。出土した遺物には須恵器（杯）、土師器、滑石製小玉、土玉がある。須恵器からみて、TK23・47 型式期の年代が与えられる。

古代末～中世

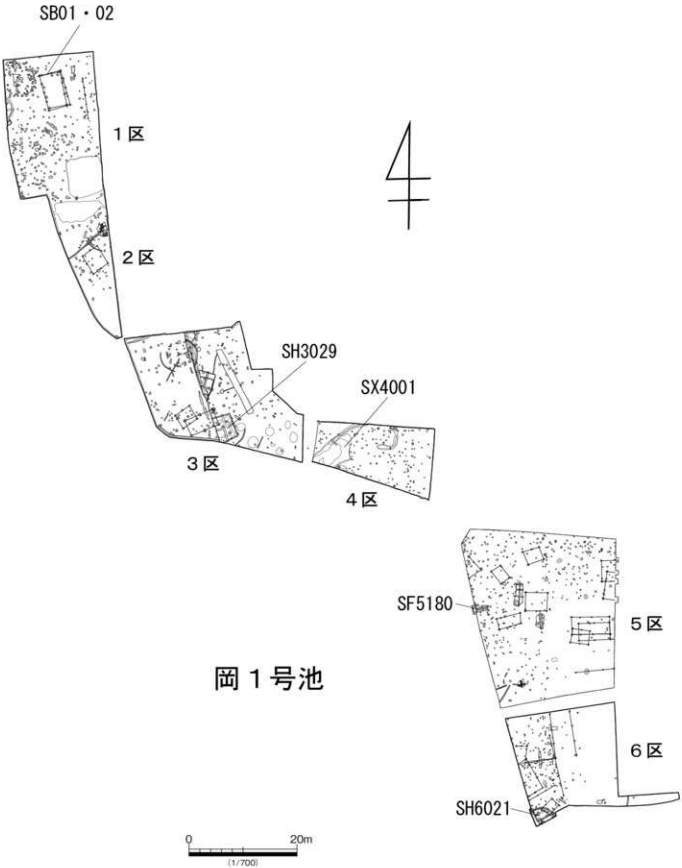
掘立柱建物跡、溝状遺構、柱穴、土坑などが確認されている。

５区で確認された土坑のなかに、長楕円形のプランをもつものが３基確認された。このうちのひとつである SF5180 は、埋土全体に炭が混じっており、地山直上に被熱痕と炭塊が確認された。これらから、SF5180 は何らかの焼成遺構であることは間違いなく、そのなかでも炭窯の可能性が推測される。また、遺構の底から小さなピットが検出された。これは天井を支える柱の痕跡と考えられる。

一方、３区と４区の間に高低差をもつ段差があり、そこを掘削すると、大量の土器が検出された（SX4001）。これは、土器を廃棄する際に、この崖の下に投棄した痕跡と考えられる。出土した土器には、土師質土器皿、杯、足釜、須恵器鉢などがあり、12 世紀後半から 13 世紀半ばの年代が与えられる。また、ここから鉄滓も出土しており、SF5180 とも連関して、本遺跡で鋳物師の生産活動があった可能性も想定される。

まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から鎌倉時代にかけての集落跡が確認された。岡遠田遺跡は洪積台地の舌状に張り出した先端部に位置しているが、水源となりうる大窪谷川から離れており、とく弥生時代に付随する溝が確認されていない。これらから、弥生時代における本遺跡では、周囲に田畑を広げるのではなく、眼下の平野や谷の低地に生産基盤を有していたと考えられる。岡田台地では、これまで良好な弥生時代の集落はほとんど確認されておらず、今回の調査は弥生時代における岡田台地の様相を考えるうえで、貴重な知見を得られたといえよう。



第12図　遺構平面図(1/700)

上道池東遺跡

上道池東遺跡は高松市香南町池内に所在する古代・近世の遺跡である。周辺の地形を俯瞰すると、洪積台地である千疋台地が四方に広がり、西には本津川、東には香東川が流れ、北には小田池が、南には音谷池が存在する。やや細かく見ると、千疋台地は台地といっても、その実、複数の谷が複雑に入り組んで形成されており、本遺跡も台地に形成された小さな谷筋の中に立地する。後世に大きく地形改変を受けているものの、西にある上道池に向かって大きく傾斜する地形であったと考えられる。

第13図　遺跡位置図（1/25,000）

遺跡の周辺には、県道円座香南線建設に伴い、香川県埋蔵文化財センターが調査した遺跡が複数存在する。横井南原遺跡は弥生時代後期の遺跡で、複数の方形周溝墓が確認されている。池内御所原遺跡・池内古田遺跡は中世～近世にかけての遺跡で、水路跡と考えられる溝状遺構などが認められる。上記以外にも、音谷池周辺に音谷池窯跡群（７～９世紀）が展開するなど、弥生時代からの遺跡が広く町内に分布する。また、台地より東方に広がる沖積平野では、条里型地割が確認でき、古来より大規模な開発が行われていたことが分かる。

写真22　SF01 炭層・被熱痕（北東から）

写真23　掘立柱建物跡　完掘（北西から）

基本層序と調査区割

上道池東遺跡の基本層序は、以下の６層に大きく分かれる。

- 第１層：現代の耕作土
- 第２層：近現代の造成土
- 第３層：近代の耕作土
- 第４層：江戸時代後期の耕作土
- 第５層：古代～中世の自然堆積層
- 第６層：地山

このうち、第４層と第６層が遺構面となる。調査区は全体で３区に分け、上道池の護岸工事の関係もあり、調査終了箇所から順次引き渡しを行った。

古代

本遺跡では古代に伴う明確な遺構は検出されなかったが、とくに２区の第４層・第５層の掘削中に大量の須恵器が出土した。器種は杯身、

杯蓋、壺、甕、円面硯などで構成され、その中で杯身・杯蓋が多い。時期は7世紀後半～末である。

また、検出された須恵器の中には他個体が融着した個体が散見されるなど、焼成不良品の存在が目立つ。こういった焼成不良品は窯跡に付随することが多いが、今回の調査では窯跡や窯壁などは確認できなかった。しかし、地山の傾斜から見て、後世の地形改変を受けるまで、東に大きく傾斜して上がる地形であったと想定され、また同じ香南町内に音谷池窯跡群がほぼ同時期に展開することを考えると、本遺跡に窯跡が存在していた可能性が高い。

今回確認された須恵器は、音谷池窯跡群内でも最古段階のものであり、当窯跡群の成立を考えるうえで、極めて重要な発見となった。

また、上記の須恵器と同時期の土師器焼成遺構（SF01）も確認されている。

近世

掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、鋤溝などが確認されている。このうち、溝状遺構は複数あり、当時の水路の痕跡であったと考えられる。また、鋤溝が第4層・第6層から無数に検出され、その周囲に多くの牛の蹄跡が見つかった。これは田起こしの際に、牛鍬を牛に引かせていた痕跡であり、近隣の池内御所原遺跡でも同様に検出されていることから、本遺跡が所在する池内地区一帯で牛を用いた耕作が行われていたと想定できる。

出土遺物には、陶磁器、焙烙などがある。

まとめ

今回の調査では、近世の水田関係の遺構を主に検出した。また、明確な遺構は確認できなかったものの、本遺跡内に7世紀後半～末の窯跡が存在していた可能性を指摘できる。

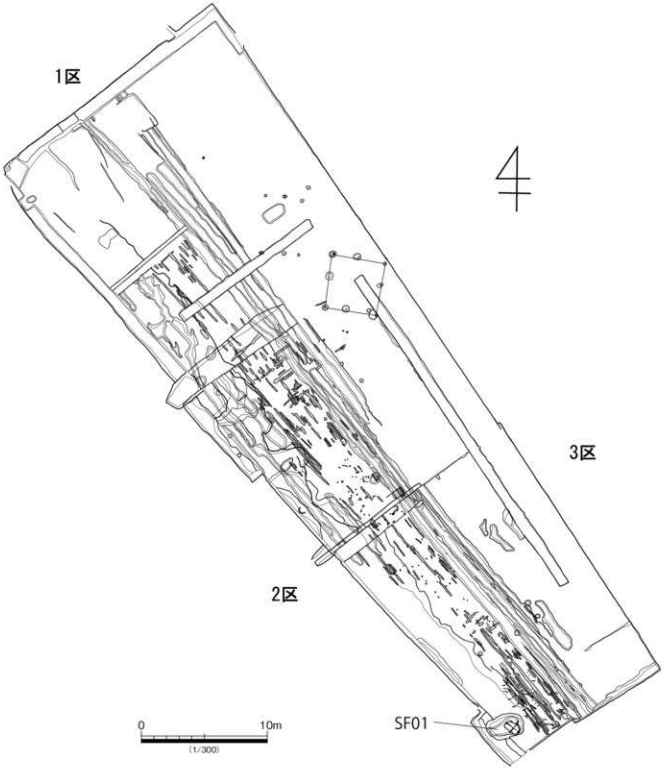
千疋台地の東方に広がる沖積平野では、古来より大規模な開発が行われ、水田域として栄えてきた。一方で、本遺跡が所在する千疋台地は、狭小な谷筋が多く、谷と丘陵との高低差が激しいため、水田耕作には本来不向きな土地であり、大きな水源もなかったため、水田域よりも、丘陵を利用した墓域や窯業地帯が広がり、まれに小規模な集落が営まれた。

台地では、水田や畑地の開発は中世以降、谷筋に沿うようにして進んだが、水源に乏しく、小範囲に留まった。しかし、江戸時代にため池が造られ、水源が確保されると、水田域として本格的に開発が進み、水田が広がる現在の景観の基礎が成立したと考えられる。

写真24　2区牛蹄跡と鍬溝（北から）

写真25　2区北半　完掘（南東から）

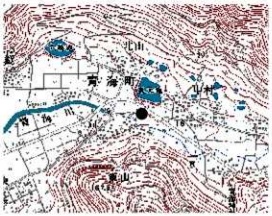
今回の上道池東遺跡の調査成果は、上記のような　千疋台地の歴史と深く関わるものと評価できるのである。



第 14 図　遺構平面図 (1/300)

青海神社下遺跡

青海神社下遺跡は坂出市青海町に所在する中世の遺跡である。遺跡周辺の地形を見ると、北側に北峰が、南側に五色台が聳え立ち、それらに囲まれるようにして深い谷筋が形成されているほか、すぐ西側には青海川が流れている。本遺跡はこの谷筋の中に立地しており、谷が埋没する過程で生じた土石流堆の上に形成されている。後世の地形改変により、詳細な地形は不明であるが、西にある青海川に向かって傾斜している。



第15図　遺跡位置図（1/25,000）

周辺には古墳時代後期の古墳である中村古墳や中世の経塚である中村経塚があるほか、崇徳上皇を祀る青海神社や白峰寺が本遺跡の背後に存在する。これら以外にも、遺跡周辺や青海町の各所に中世後半～近世にかけての石造物が残されている。また、遺跡の西方には弥生時代後期の製塩遺跡である高屋遺跡が、北西の前峰の尾根上には古墳時代前期の積石塚であるスベリ山古墳群が認められる。

写真26　1区棚田の石垣（北西から）

遺跡のベース土は土石流堆に伴う大小の礫を多く含んだ砂混じりの粘質土である。層序については、表土、造成土（高松坂出線建設時）、旧耕作土（高松坂出線建設前）、遺構面の大きく4層に分かれる。調査区は3区に分けて設定した。

今回の調査では、中世・近現代の遺構・遺物を確認した。遺構としては掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構・土坑などを確認し、遺物は土師質土器・瓦質土器などが出土した。

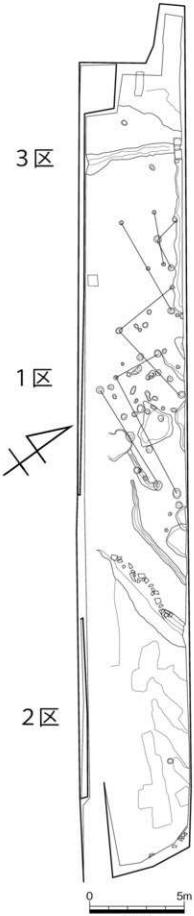
写真27　完掘　全景（北西から）

中世

掘立柱建物跡、柱穴、溝状遺構、土坑が該当する。掘立柱建物跡は4棟復元することができた。柱穴内から土師質土器皿が出土している。土坑からは楠井窯産瓦質土器鉢が出土した。両者とも使用後に廃棄されたものと考えられる。これらの土器の年代は14世紀後半から15世紀前半である。

近現代

棚田の地境となる石垣を2基検出した。石材は安山岩ないしは砂岩の亜円礫であり、青海川でも採取できるものである。高松坂



第16図　遺構平面図(1/200)

出線建設前に一段低い棚田が存在していたという近隣の地権者のお話や、戦前の高松坂出線建設前の空中写真でも棚田が確認されたことから、高松坂出線建設前の棚田の痕跡と判断した。

まとめ

今回の調査では、主に中世の集落跡を検出した。しかし、現代の集落が周辺に存在せず、水源となるため池が近世以降に成立したことを踏まえると、今回検出された集落は現代に継承されていないと考えられる。つまり、本遺跡で確認された中世集落は、現代に継承されていない当地域における中世集落のあり方の一端を示している可能性がある。また、背後に位置する青海神社も鎌倉時代（13世紀）には成立していたと考えられ、山上の白峯寺や崇徳陵も含めた崇徳上皇への信仰の場を支えた集落である可能性も想定される。

2　普及・啓発事業

(1) 展示

①　香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル	場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史	第１展示室	４月１日～３月 31 日
讃岐国府ヒストリア－過去・現在・そして未来－	第２展示室	４月１日～５月 13 日
令和元年度発掘調査速報展	第２展示室	５月 21 日～９月８日
令和２年度四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展　海と人々２	第２展示室	９月 28 日～ 12 月 11 日
同時国史跡指定記念交換展示　播磨灘を望む城　引田城跡に迫る	第２展示室	１月４日～３月５日

第９表　展示一覧

一般			団体											合計
			団体数					構成員数						
大人	子ども	計	一般	高校生	小・中学生	幼稚園	計	一般	高校生	小・中学生	幼稚園	計		
1,167	83	1,250	1	0	8	0	9	66	0	281	0	347		1,597

※ 4/24（金）～ 5/6（水）は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時休館

第 10 表　入館者数一覧　単位：人

②　香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル	場所	会期	観覧者数（人）
讃岐国府ヒストリア－過去・現在・そして未来－	高松市讃岐国分寺跡資料館	５月 19 日～７月５日	311
讃岐国府跡展	坂出市大橋記念図書館	７月１日～９月 27 日	1,000
讃岐国府ヒストリア－過去・現在・そして未来－	三豊市宗吉かわらの里展示館	７月 15 日～８月 26 日	423
讃岐国府ヒストリア－過去・現在・そして未来－	観音寺市中央図書館	12 月 15 日～ 12 月 27 日	102
讃岐国府ヒストリア－過去・現在・そして未来－	東かがわ市歴史民俗資料館	１月 16 日～３月 15 日	290
讃岐国府ヒストリア－過去・現在・そして未来－	香川県立図書館	１月 19 日～２月 21 日	826
令和２年度四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展　海と人々２	松山市考古館	６月６日～７月５日	780
	高知県埋蔵文化財センター	７月 12 日～９月 13 日	1,140
	徳島県立埋蔵文化財総合センター	１月８日～３月 14 日	1,222
合　計			6,094

第 11 表　センター外展示一覧

(2) 現地説明会・地元説明会等

番号	内　容	実施日	対象	参加者数（人）
1	青海神社下遺跡地元説明会	８月 23 日	一般	66
2	讃岐国府跡現地説明会	11 月７日	一般	104
3	上道池東遺跡現地説明会	１月 23 日	一般	31
4	令和２年度讃岐国府跡開法寺跡発掘調査報告会	３月６日	一般	80
合　計				281

第 12 表　現地説明会・地元説明会一覧

(3) 講師の派遣

①　体験講座など

例年、５～６件の体験講座へ講師を派遣しているが、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、外部団体から講師派遣の依頼はなかった。

② その他

	依頼者	実施日	内容
1	香南コミュニティセンター	6月8日	講演
2	讃岐国分寺跡資料館友の会	6月27日	講演
3	香南コミュニティセンター	7月13日	講演
4	筆岡小学校	10月24日	講演
5	府中壮成大学	11月12日	講演
6	木岡哲学対話の会	11月27日	講演
7	公益社団法人香川県観光協会	11月28日	講演
8	香川大学教育学部附属高松中学校	12月15日	講演
9	三木町文化財保護協会	1月16日	講演
10	香南コミュニティセンター	2月8日	講演
11	高瀬町公民館	2月26日	講演
12	香南コミュニティセンター	3月8日	講演
13	府中壮成大学	3月11日	講演
14	蓬莱歴史研究会	3月16日	講演
15	114銀行プレミアムサロン	3月19日	講演

第13表　講演等への講師派遣一覧

(4) 体験講座

8月12日～2月7日に体験講座を行った。

実施日	タイトル	内容	人数（人）
8月12日、2月7日	ふるさと学習　小中高校生のための考古学講座	実物の考古資料に触れながらの講義および丸ペンダントづくり、印鑑づくり	12
9月19日、12月13日	「まいぶんボランティア」による「南海道」をテーマとした他団体との交流事業	南海道に関する討議	14
合　計			26

第14表　体験講座実施事業一覧

(5) 発掘体験講座

11月28日に発掘体験講座を行った。

実施日	タイトル	内容	人数（人）
11月28日	遺跡に触れてみよう！～岡遺田遺跡～	発掘体験講座	5
合　計			5

第15表　発掘体験講座

(6) 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を4日（同日、午前・午後の2回）開催した。

	実施日	タイトル	講師	人数（人）
1	7月5日	木の道具からみる江戸時代の暮らし	山元素子	32
2	9月6日	考古学探偵団～地形から歴史を読み取れ～	宮崎哲治	35
3	11月8日	坂出市の海岸線の変遷	森下友子	35
4	3月21日	香川の城跡でたどる戦国武将・生駒親正の足跡	西岡達哉	40
合　計				142

第16表　考古学講座

(7) まいぶんボランティア活動

まいぶんボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助などを行った。20名が登録し、16回、延べ119名が活動に参加した。

(8) 新聞記事掲載

四国新聞に「ディープＫＡＧＡＷＡ 2020　アーケオロジー（考古）編」として、計 24 回の連載を行った。令和２年３月に国史跡に指定された讃岐国府跡について紹介する「讃岐国府跡へのアプローチ」(7 回)、令和２年度発掘へんろ展に関連して、海辺の城跡での出土品について紹介する「グルメな武士たち」(3 回)、古来、香川の名産品として名をはせた産物を考古学の観点から紹介する「讃岐ブランドを考古学する」(6 回)、専門職員が自身の発掘調査の経験や調査研究などについて紹介する「発掘現場で考えた」(5 回)、香川の城跡について所長が語る「続埋文雑感～所長の独り言～」(3 回) で構成した。

(9) 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会・同好会	教育委員会・博物館・その他公共団体	出版社・新聞社・その他民間企業	個人・他	合計
遺物	3	0	23	0	26	52
写真・パネル	1	0	10	4	1	16
レプリカ・模型	0	0	1	0	0	1
合計	4	0	34	4	27	69

第 17 表　資料貸出・利用一覧（数字は件数）

(10) 職場体験学習・インターンシップ

	学校名	期間	内容	人数（人）
1	高松短期大学	8 月 12　日～9 月　9 日	職場体験	7
合　　計				7

第 18 表　職場体験学習・インターンシップ一覧

(11) 刊行物

『香川県埋蔵文化財センター年報　令和元年度』

『いにしえの讃岐』105 号

(12) ホームページ

ホームページ（http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/）の更新を随時行った。

トップページビュー数　　22,592

(13) ツイッター

ツイッター（https://twitter.com/KagawaMaibun）を５月から開始し、更新を随時行った。

更新回数　　95 回

フォロワー数　238 人（令和３年３月 31 日現在）

3　讃岐国府跡探究事業

「香川県文化芸術文化振興計画」に基づき平成 21 年度から開始した讃岐国府跡探索事業は、平成 29 年度で終了し、平成 30 年度から新たに讃岐国府跡探究事業を 3 年計画で実施している。主な調査事業として讃岐国府跡の遺構内容の確認を目的とした発掘調査を実施した。

今年度は、国史跡に指定された開法寺東方地区とは別の主要施設が存在すると想定されている場所で発掘調査を実施した。調査の結果、鎌倉～室町時代の掘立柱建物や井戸からなる屋敷地などが見つかった。

讃岐国府跡を活用した情報発信事業として、現地説明会を開催した。また、第 2 回讃岐国府まつりの関連企画として、小中高校生のための考古学講座「讃岐国府跡と印鑑」を開催した。

(1) ボランティア活動

・登録人数　　20 人

・延べ人数　　119 人

(2) 地域との交流

例年、地域との交流企画として、「水のフェスティバル in 府中湖」において讃岐国府跡周辺のウォーキングや出前展示を行っている。だが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、本フェスティバルが中止となった。また、代替企画も実施できなかった。

(3) 情報発信

内容	回数
ホームページへの記事掲載	5
情報誌「いにしえの讃岐」への記事掲載	1
新聞への連載記事掲載	7
新聞への記事掲載	3
テレビ出演	2

第 19 表　情報発信一覧

(4) 関連行事

行事名	会場	実施日	参加人数（人）	種別
讃岐国府ヒストリアー過去・現在・そして未来―	高松市讃岐国分寺跡資料館	5 月 19 日～7 月 5 日	311	展示
讃岐国府跡展	坂出市大橋記念図書館	7 月 1 日～9 月 27 日	1,000	展示
讃岐国府ヒストリアー過去・現在・そして未来―	三豊市宗吉かわらの里展示館	7 月 15 日～8 月 26 日	423	展示
讃岐国府ヒストリアー過去・現在・そして未来―	観音寺市中央図書館	12 月 15 日～27 日	102	展示
讃岐国府ヒストリアー過去・現在・そして未来―	東かがわ市歴史民俗資料館	1 月 16 日～3 月 15 日	290	展示
讃岐国府ヒストリアー過去・現在・そして未来―	香川県立図書館	1 月 19 日～2 月 21 日	826	展示
讃岐国分寺跡資料館友の会講演会	讃岐国分寺跡資料館	6 月 27 日	19	講演・講座
小中高校生のための考古学講座「讃岐国府跡と瓦」	香川県埋蔵文化財センター	8 月 12 日	10	講演・講座
讃岐国府跡現地説明会	讃岐国府跡周辺	11 月 7 日	104	講演・講座
府中壮成大学	府中公民館	11 月 12 日	63	講演・講座
さぬきアカデミー	香川県埋蔵文化財センター	11 月 28 日	50	講演・講座
第 2 回讃岐国府まつり	讃岐国府跡周辺	2 月 7 日	250	講演・講座
小中高校生のための考古学講座「讃岐国府跡と印鑑」	香川県埋蔵文化財センター	2 月 7 日	2	講演・講座
令和 2 年度 讃岐国府跡開法寺跡発掘調査報告会	坂出市ふれあい会館	3 月 6 日	80	講演・講座
蓬莱歴史研究会	丸亀市生涯学習センター	3 月 16 日	35	講演・講座

第 20 表　関連行事一覧

（5）第３８次調査成果の概要

遺跡名	讃岐国府跡
調査主体	香川県教育委員会
調査担当	香川県埋蔵文化財センター
調査期間	令和２年９月１日～令和２年 12 月６日
調査面積	60㎡
出土遺物	コンテナ数 12 箱 （土器・瓦・石器）

国分寺
国分寺
国分寺

出土遺物は土師質土器小片が認められる程度で、年代の特定までは困難であるが、中世の遺構の切り合いから、古い段階のものと判断できる。

ＳＢ 1002

ＳＢ 1001 の南で検出した。３基の柱穴が概ね等間隔で東西方向に並ぶが、柱の間隔から見て北及び西へは建物が広がらないと考えられるが、規模は不明である。柱穴は直径 0.2 ｍ程度で、深度はＳＢ 1001 より浅い。

出土遺物は土師質土器小片のみで、概ねＳＢ 1001 と同時期のものと考えられる。

なお、これらの建物の周辺には近接して複数の柱穴が確認でき、他にも建物が存在する可能性がある。

ＳＢ 1003

調査区東端で検出した。南北に２基の柱穴が並ぶ。いずれも平面形が隅丸方形を呈し、一辺が約 0.5 ｍを測る。柱穴深度は 0.2 ｍ程度で残存状況は不良である。西側には対応する柱穴が認められず、当該柱穴が掘立柱建物の西側柱列をなすものと考えられる。

出土遺物は小片で時期決定に耐えられないが、既往の調査の事例からは古代のものの可能性が考えられる。

なお、調査区西側では、溝ＳＤ 1005 や井戸ＳＥ 1001 を検出した。

ＳＤ 1005

方向が条里型地割に合致せず、地形に合わせた平面形を持つが、古代末～中世前半の遺物を含んでおり、その時期に機能した溝であると考えられる。

ＳＥ 1001

調査区北西隅で検出した。完掘していないが、埋土に直径 20cmほどの礫を含むことから、石組み井戸の可能性がある。出土遺物から、16 世紀代のものと考えられる。

小結

本調査区については、中世以降の屋敷地の展開状況を確認したほか、古代の遺構の広がりの西辺をとらえたことが成果である。

38 － 2 区

38 － 2 区でも、１面遺構面を確認した。遺構の検出面の標高は 16.0 ｍ程度で、概ね 38 － 1 区と同様であり、東半に柱穴が集中する。いずれも中世の小規模柱穴であり、柱穴群の西側には、条里型地割の方向に合致する溝ＳＤ 2001 を確認した。東端でＳＢ 2001 を復元した。

ＳＢ 2001

南北に２穴からなる柱穴列を認め、西側には関連する位置に柱穴を認めないことから、建物の西側柱列と判断した。

出土遺物は土師質土器の小片がごく僅かで時期比定は困難である。概ね中世前半のものと考える。

なお、調査区の西端付近においては、井戸ＳＥ 2002 を確認した。

ＳＥ 2002

直径約２ｍのいびつな円形を呈し、深度は 1.5 ｍ以上を測る。下位に石組みの痕跡を残しており、裏込め土や井戸の埋土で確認される遺物の年代から、15 世紀代の井戸であり、38 － 1 区の井戸に先行す

る時期のものである。

小結

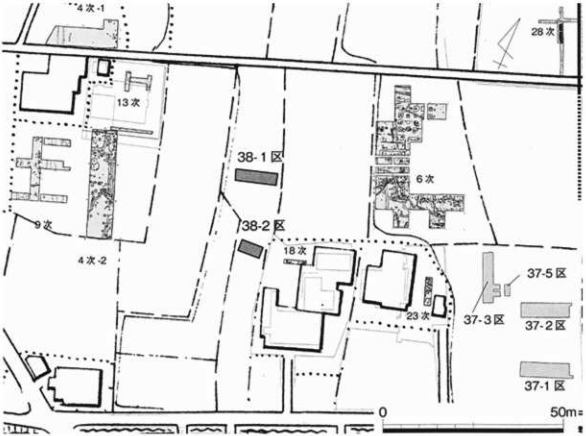
38－2区においては、東側に隣接する宅地にて行われた発掘調査で検出された古代の柱穴などにつながる遺構は確認されなかった。しかし、中世の遺構の展開状況からも、古代の遺構が削平を受けていたとは考え難く古代の遺構の展開状況を推察する成果が得られた他、中世全般にわたって遺構が見られることも明らかとなった。

まとめ

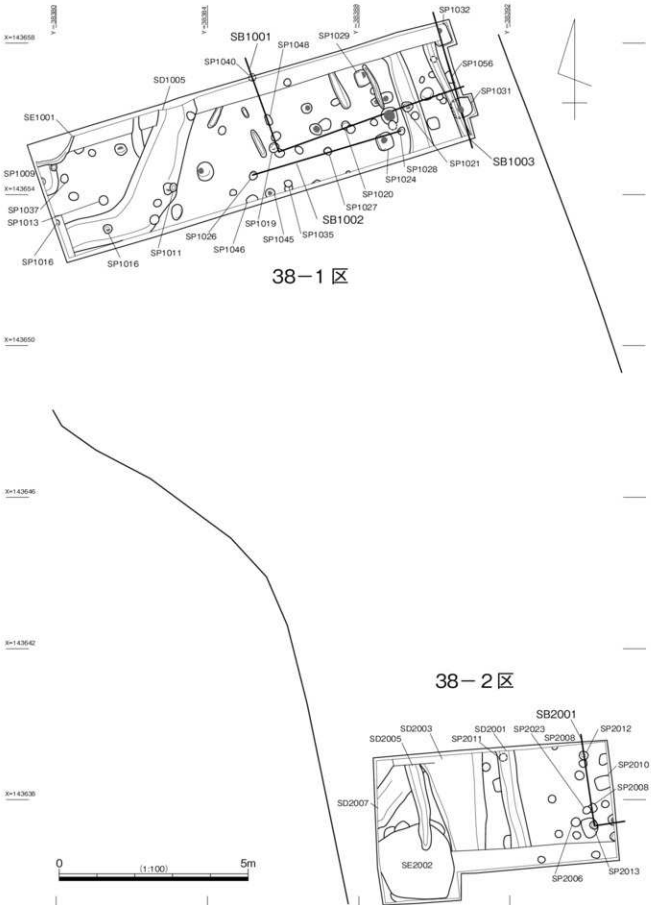
今年度の調査では、当初の目的であった令和元年度調査で確認した大型建物やそれらを区画する2条の溝状遺構といった施設に対応するものについては確認できなかった。しかし、今年度の調査地の東半でも古代の遺構が分布することがわかり、著しく古代の面が削平されているわけではないこと、今回の対象地のさらに東側に先述の施設の西辺が存在する可能性があることなどが明らかになり、今後の調査の指標となった。

写真28　38-1区　全景（南東から）

写真29　38-2区　全景（西から）



第18図　令和2年度対象地（38-1区、38-2区）と周辺の既往の調査地位置図



第 19 図　令和２年度調査対象地　38 次調査　遺構平面図 (1/100)

Ⅲ　調査研究

【資料紹介】安藤文良氏旧蔵の須恵器円面硯について

蔵本　晋司

1　はじめに

陶硯は、古代の文書事務を考える上で、欠くことのできない資料であり、その出土遺跡は、製作地を除けば、その実務的な役割を有した場所として位置付けられ、遺跡の性格を評価する上で、重要な位置を占める資料である。それ故に、本県においても、古くから資料の収集と分析が繰り返しなされてきた（片桐 1995・佐藤 1998・中西 2006・松本 2019・森下 2019）。筆者も、杯蓋硯や風字硯について、かつて検討したことがある（蔵本 2020a・2020b）。先学諸氏の研究により、陶硯の編年的な研究は近年著しく深化しており、出土遺跡の評価、性格の究明が今後の大きな課題であろう。

今回紹介する資料は、善通寺市在住の郷土史研究家であった故安藤文良氏旧蔵で、当センターへ寄贈された資料のうちの１点で、須恵器圏足円面硯と考えられる土器片（資料番号・EAD0818）である。当センターの資料リストには「弥生土器器台？」と登録されているが、形状から円面硯と考える。

現在、香川県内で円面硯は 34 遺跡から 104 点を超える資料が出土しており、今後も資料数の増加は必然である。上述したように、律令期の文書行政を考察する上で、重要な位置を占める遺物でもあり、今回ここに資料を紹介することとした。

2　出土資料

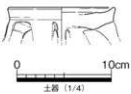
資料は、破片で硯面の約半分と脚部の一部が残存する。脚端部が失われているため、全形は不明である。内外面の色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈し、還元炎焼成されていない焼成不良品である。長径１～２㎜程度の石英・長石粒がやや多量に含まれるが、須恵器としてそれほど異質な感じは受けない。石粒が目立つのは、器表面が若干剥離・マメツしていることも原因として考えられる。したがって、細かな調整等は現状で確認できない。硯面周縁部の外周径は復元値で 11.0cmを測り、円面硯としては小型の部類に属する。

硯面部は、陸部と海部の境が不明瞭で、海部に明確な窪みに乏しい。これは陸部器表面の剥落やマメツの影響が大きい可能性があり、当初よりそうした形態であったかは不明である。周縁は断面矩形を呈し外上方へ立ち上がるが、高さは海部より５㎜程度と低い。硯面部の器壁の厚さは 1.2cm前後を測る。

脚部は、周縁部より緩やかに外反して開き、硯面部と脚部を明確に画する突帯等は認めない。脚部の装飾として、三角形状と台形状の透孔が交互に配され、残存部から判断して、三角形状の透孔８ヶ所、台形状の透孔４ヶ所が復元される。

円面硯は個体差が大きく、編年的な位置付けは破片資料からはやや困難だが、周縁や透孔の形状から、片桐孝浩氏（片桐 1995）や松本和彦氏（松本 2019）の編年作業を参考に、８世紀中葉～後半に位置付けるのが妥当だと思われる。

本資料については、明確な出土場所についての情報は残されていない。ただし硯面部に「瓦山」と墨書されており、これが出土地を示す唯一の手掛かりとなる。この墨書は、当センター搬入時には既に書かれており、安藤氏が書かれた



第 20 図　円面硯実測図

写真 30　円面硯写真

ものである可能性が高い。「瓦山」が出土地を示すかどうかは不詳だが、氏の旧蔵資料には、採集した場所等が遺物に直接墨等で書かれたものが多くあり、「瓦山」が資料の採集場所である可能性は高いと考えられる。上述したように当資料は焼成不良品であることから、消費地遺跡で出土したものではなく、生産遺跡で拾得された可能性が高い。なお、「瓦山」出土資料は、氏のコレクションの中で、唯一の資料である。

さて、安藤氏のコレクションには、土器や石器、瓦等の考古資料を中心に、鉱滓や陶土、富士山や桜島等の岩石標本、瓦を中心に銅鐸や鰐口等の拓本、貝塚出土の貝類やナウマンゾウの化石標本等、様々な種類がある。考古資料の出土地については、一部に出土地不明の資料を含むものの、香川県内を中心に、広島県や奈良県、東京都、千葉県、北海道等の資料があり、氏の広い交友関係や各地の遺跡探訪の足跡を辿ることができる。このうち、香川県内出土資料は、全資料の9割以上を占めるようであり、氏の居宅のあった善通寺市を中心とした主に香川県西部地域の資料が多い。今回紹介する資料は、胎土は香川県内出土資料として矛盾はなく、仮に他地域出土資料とすれば、他の資料にみられるように詳細な出土地が記載されているはずであり、明確な出土地は不明なものの、本県内出土資料と判断したい。

上述した仮定の上で、県内で「瓦山」の名称が付く窯跡は、丸亀市飯山町東坂元の瓦山窯跡が候補となる。『飯山町誌』では、瓦山窯跡は文字通り瓦窯とされ、丸亀市法勲寺の瓦を焼成した窯として記載されている（大山 1988）。

窯の位置は、楠見池北東の舌状に張り出した、標高80 m程の丘陵頂部の緩斜面部に所在するとされるが、窯の立地としてはやや不自然な場所である。写真31は、遺跡が所在するとされる丘陵頂部付近を西から撮影したものである。遺跡が所在したとされる丘陵は民有地で、現在出土地とされる写真奥の丘陵頂平坦部東斜面の一部は削平され、太陽光発電所となっており、本位置に遺跡が所在したのであれば、遺跡は完全に消滅したものと考えられる。残丘部分を踏査したが、窯壁片や須恵器や瓦片等の遺跡が所在した痕跡を見つけることはできなかった。

県の遺跡地図では、『飯山町誌』の位置を含む丘陵東斜面部全域が、窯跡の所在地として登録されており、明確な位置は特定されていない（第21図には、県の遺跡地図に掲載されている遺跡範囲を示した）。おそらく、『飯山町誌』に示された場所ではなく、遺跡地図に示された範囲内のうち、丘陵下方の斜面部に窯が所在したと考えられる。しかしながら、丘陵の山林は

写真31　伝遺物出土地近景（西より）

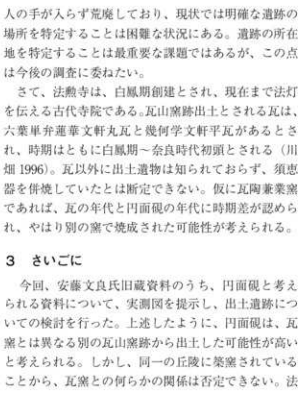


写真32　瓦山窯跡のある丘陵遠景（北東より）

人の手が入らず荒廃しており、現状では明確な遺跡の場所を特定することは困難な状況にある。遺跡の所在地を特定することは最重要な課題ではあるが、この点は今後の調査に委ねたい。

さて、法勲寺は、白鳳期創建とされ、現在まで法灯を伝える古代寺院である。瓦山窯跡出土とされる瓦は、六葉単弁蓮華文軒丸瓦と幾何学文軒平瓦があるとされ、時期はともに白鳳期～奈良時代初頭とされる（川畑 1996）。瓦以外に出土遺物は知られておらず、須恵器を併焼していたとは断定できない。仮に瓦陶兼業窯であれば、瓦の年代と円面硯の年代に時期差が認められ、やはり別の窯で焼成された可能性が考えられる。

3　さいごに

今回、安藤文良氏旧蔵資料のうち、円面硯と考えられる資料について、実測図を提示し、出土遺跡についての検討を行った。上述したように、円面硯は、瓦窯とは異なる別の瓦山窯跡から出土した可能性が高いと考えられる。しかし、同一の丘陵に築窯されていることから、瓦窯との何らかの関係は否定できない。法

勲寺については、建立氏族は不明で、綾氏の氏寺であった可能性も指摘されているが、なお検討課題は多いとされる（大山1988）。いずれにしろ法勲寺は、鵜足郡の郡領氏族が建立したものであることには間違いはなかろうし、彼は大束川西岸の平野部域のみではなく、東岸域の丘陵部にまで影響力を有し、瓦窯や須恵器窯の経営にも携わっていたと考えられる。また、近年発掘調査された丸亀市飯山町岸の上遺跡が、鵜足郡衙の一つであるなら、寺や郡衙で消費される瓦や須恵器の生産の具体像を検討する上で、瓦山窯跡は貴重な資料の一つであり、また、綾歌郡綾川町十瓶山周辺窯へ、窯業生産が収斂していく前段階での、郡領氏族の窯業生産への関与を考える上でも、重要な資料となろう。今後、瓦山窯跡の実態の解明について、検討を進める必要があろう。

安藤文良 1987「歴史時代・古瓦」『香川県史』第13巻資料編考古，香川県

大山真充 1988「古代」『飯山町誌』，飯山町

片桐孝浩 1995「香川県出土の古代陶硯についての一考察」『香川考古』第4号，香川考古刊行会

川畑聡 1996『第11回特別展　讃岐の古瓦展』，高松市歴史資料館

蔵本晋司 2020a「三殿北遺跡出土の陶硯について」『国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊　三殿北遺跡』，香川県教育委員会他

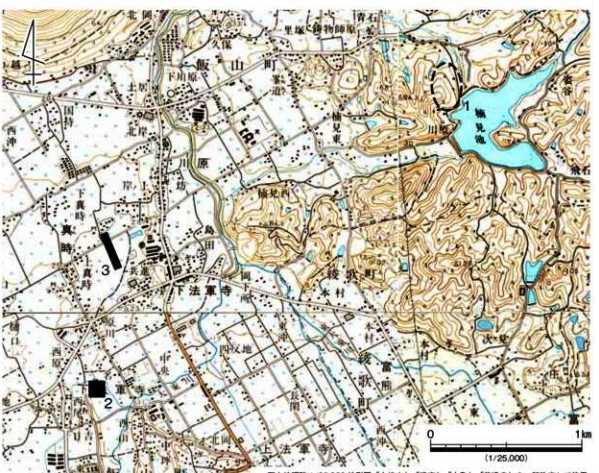
蔵本晋司 2020b「香川県内出土の陶硯についての素描－風字硯・猿面硯の編年作業を中心として－」『さぬき野に　種をまく』，『片桐さん』退職記念論集刊行会

佐藤竜馬 1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』，古代学研究会四国支部

中西克也 2006「陶硯について」『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第3冊　新田本村遺跡』，高松市教育委員会

松本和彦 2019「陶製硯と文字資料」『讃岐国府跡2』，香川県教育委員会

森下英治 2019「風字硯について」『国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊　西村遺跡』，香川県教育委員会他



1．瓦山窯跡　2．法勲寺跡　3．岸の上遺跡

第21図　遺跡位置図

香川県埋蔵文化財センター年報

令和２年度

2022（令和４）年 ３月 18 日　発行

編集・発行　香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024
香川県坂出市府中町南谷 5001 番地４
電　話（0877）48 － 2191
ＦＡＸ（0877）48 － 3249

印　刷　　ナカハタ印刷株式会社